



TITLE:

シェーカーズ

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. シェーカーズ. 経済論叢 1963, 92(4): 228-250

ISSUE DATE:

1963-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132967>

RIGHT:

經濟論叢

第九十二卷 第四號

国民所得倍增計画における

計画表とその再評価の問題……………青山秀夫 1

シェーカーズ……………穂積文雄 18

サービス労働の生産的性格……………橋本 勲 41

昭和三十八年十月

京都大學經濟學會

シャーカーズ

穂 積 文 雄

四

ニューヨークに上陸すると、マザー・アンは、つきしたがってきたひとびとに、さとして、どこでもよい、しばらく、つとめぐちをさがして、生計をたてよ、といった。それは、かれらが、みな、まずしく、はたらいてくうほか、なかったからである。そこで、かれらは、わかれて、あちこちに、ちつていった。アンは、ニューヨークにとどまり、クイーン街(Queen-street)——いまのパール街(Pearl-street)——のスマス(Smith)というひとの家に身をよせ、その家人から、きわめて、あたたかく、遇せられた。そして、一七七六年の春まで、そこに、滞在した。かの女の夫アブラハム・スタンレイは鍛冶屋のつとめぐちにありつき、かの女は、そのやといぬしの家の家政婦をした、ということである。¹⁾しかし、そのやといぬしがスマス家であつたかどうかは、いま、わたくしは、なんともいえない。

ジョン・ホックネルは、このとき、家族をひきとるため、また、この国にソサイエチーをもうける要件のため、に、イギリスに、たつていった。その留守中、マザー・アンは、何度もハドスン河(The Hudson)をさかのぼつて、ソサイエチーのひとびとをたずねた。そのとき、ソサイエチーのひとびとは、オルバニー(Albany)のちか

くに、おちついてゐたからである。それは、ソサイエチーの中でかねもちであつたホックネルが、そこに土地を買つたからである。しかし、かの女は、まだ、ニューヨークをはなれなかつた。

一七七五年夏のおわりから秋のはじめにかけて、アブラハム・スタンレイは、おもいやまいにおかされた。マザー・アンは、つつきりで、みとりをせねばならなかつた。それは、かの女にとつて、大變に苦勞なことであつた。

しかし、かの女は、ここをこめて、そのつとめをつくした。そのため、かれらは収入のみちをうしない、極貧におちいった。

そのうち、アブラハムは、やつと、健康を回復し、街をあるけるようになった。かれは、いままでも、道信堅固な信者とはおもえなかつたが、それでも、なお、これまでのところは、信仰に忠実なふりをよそおつて、その信用と声価をつなぎとめていた。ところが、健康を回復したとはいつても、まだ、充分に、つとめに出ることもできぬうちに、かれは、のみや、(public houses)のいかがわしい女となれそめた。やがて、信仰をすてた。そして、不信心の極、マザー・アンのあかしにそむきはじめ、かの女に、それを放棄して、世俗とおなじに、性生活をいとなむことを、せまるにいたつた。かの女は、正義・性および人道の要求するところのものは、なんでも、よろこんで応じる、しかし、神への義務をやぶることだけは、応じるわけにゆかない、と、こたえ、かれに、義務にたちかえり、信仰をつづけるように、百方、といった。

しかしながら、アブラハムの世俗の生活にはいる決心はかたかつた。かれは、そのしごとにかえらないで、悪習をつづげ、アンをすてて、かえりみなかつた。あげくのはて、その淫奔な女を家にひきいれ、アンの前につれてきた。そして、アンが性生活をいとなむことに同意しないなら、その女を妻にする、と、いつた。アンは、たとえ、

いのちをとられても、同意するつもりはない、と、きっぱり、こたえた。

かの女は、かれにむかつて、卒直に、かれの残酷暴逆なしうちは、かの女が、かれの元気なときも病気のときも、かれにつくした、たえてかわらぬいたわりに対し、恩を償でかえずものであるとおもう、と、いい、かれがその義務にたかえり、ただしきをおこなうならば、まことをつくしてかれにつかえるであらう、と、いい、信仰の道にたちかえるよう懇願した。しかし、馬耳東風、かれは、まもなく、その女をつれて、まちのとおくえ、去った。かくて、マザー・アンとアブラハム・スタンレイとの仲は絶えた。爾後、かれの消息は杳としてつたわらない。

そこで、かの女は、水路オルバニーへ行き、そこより、さらに、ニスケウナ(Niskewuna)——いまのオーターブリート(Waterbriet)——にいった。そして、九月のなかばころ、そこに、居をさだめた。オルバニー市の中心から北西八マイル。現在、教会がたっている。ひとざとおくはなれた、荒野のなかのさびしいところであった。ここに、「信ずるひとびと」は、あつまって住んだ。そして、ここで、かれらは、おごそかなあつまりをもった。とくに、週のはじめの日に、そうした。それは、一七八〇年の春あかしのはじまるまで、満三年つづく。

(1) Everett Weber, *Escape to Utopia*, p. 45.

(2) *ibid.*, p. 46.

附記 本誌前々号掲載本稿第二節注に附記せるところは、本節にも、くり返えされねばならない。

五

アメリカにおいて、はじめて、あかしがあらわれたのは、ニューヨーク州コロンビア郡のニュー・レバノン(New

Levanon, county of Columbia, and State of New York) においてであつた。一七七九年、この地方に、いちじるしい宗教のめざめ (a remarkable religious awakening) がまきおこつた。そして、それはその翌年 (一七八〇年) にはじまる福音をうけいれるためのみちならしであつた。そう、シェーカーのひとびとは、いつている。その結果、その福音は、多数のひとびとによって、うけいれられた。

おもうに、ひとは、とかく、ないもの、ねだりをする。ひとは、ふくかぜのえだもならさぬみよをことほぐ。それが人情である。しかも、太平になれては、ことあれかしと、ひそかに、まちのぞむ。すくなくとも、このころの、どこかに、そのようなきもちが、ひそむ。そんなものでは、なかりうか。それほど、ひとは、ないもの、ねだりをするものである。それなら、ちなまぐさい戦乱の世にあつて、平和えのねがい、をいだくにいたるのは、もつとも、ありうるところで、なければならぬ。そして、このとき、アメリカのこの地方は、アメリカ革命のさなかであつた。独立のためのたたかいが、いまや、たけなわであつた。ひとびとの中に平和えのねがい、がうまれるのは、あやしむのもちいぬところで、なければならぬ。そういつてよいであらう。しかし、それは、かれらのおもうにまかせぬところである。かれらのちからでは、かなわぬところである。かなわぬときのかみだのみ。まことに、それは、古今東西、いつでも、どこにも、みられる、ひとのすがたである。かくて、ここに神への信仰がたかまる。ニュー・レバノン付近のひとびとの間に、異常なまでに、信仰がたかまつたのに、ふしぎはあるまい。むしろ、当然の現象といつてよいであらう。ところで、かれらは、もと、クリスチャンである。クリスチャンの平和へのねがい、が千年王国の希求と無縁であることは、ありがたいところであらう。すくなくとも、この場合、かれらのところは、現在の戦乱より最後の審判の日のちかづけるを信ずるにいたり、千年王国へすくわれのこることのねがい、で、いっぱいに

なつていたであらう。それは、察するにたたくところであらう。そう、かんがえてよいであらう。すくなくとも、わたくしは、そうかんがえる。そうかんがえると、かれらが、オーターブリートのひとびとのうわさをきいたとき、おぼれるものは、わらをもつかむ、で、かれらの一団が、ひかりをもとめて、オーターブリートをたずねたことも、きわめて、容易に、うなづけるであらう。かくて、かれらは、オーターブリートに來た。マザー・アンのおしえが、最後の審判・キリストの再現、千年王国の出現においてなりたつことは、われわれのすでに知るところのごとくである。しからば、たづねてきたひとびとが、それにひきつけられるのは、あえて、異とするにたらぬであらう。

ありが、あまきにつき、水がひくきにしたがうが、ごときものである。そういつても、よいであらう。その場合、かれらにとつて、結婚のたのしみの放棄が、なんであらう。それはくるしいことにはちがいない。しかし、くるしいことをあえてするところにこそ、かえつて、信仰の情熱がわくというものであらう。それは論理にあわぬ、と、いうひとがあれば、論理に合はぬところにこそ、宗教的興奮がある、と、こたえるだけのことである。そればかりではない。興奮はシェーカーのうたとおどりのよつて、さらに、あおられる。かくて、かれらは、シェーカーのムードにまきこまれた。完全にそのとりことなつた、そして、それに帰依したじぶんをみいだした。そして、シェーカーは、アメリカにおける最初の帰依者 (converts) を得た。

これらの帰依者は、ニュー・レバノン・その他の地方から指導や相談をもとめて、オーターブリートに來た。その数は多かった。しかるにかれらの本拠はオーターブリートから、約四〇マイルはなれていた。そこで、ひとびとは、じぶんたちの食料を持参することが必要だと、しつた。ところが、そのことは、やがて、一部の偏見者流の誤解をまねく因となつた。これら偏見者流は、これらのひとびとを国家の敵である、と、糾弾し、当局をうごかして、

これらのひとびとを迫害し、困窮に、おとしめようとするにいたった。

かくて、事件がおこった。一七八〇年七月、デビッド・ダッロー (David Darrow) というものが、ニュー・レバノンとオルバニーの間を、羊の群を、オーターブリートに追つていた。そのとき、一団の悪意をいだくものたちが、かれを追跡し、当局の名において、逮捕し、羊もろとも、ニュー・レバノンに、つれもどし、反逆罪の名の下に、法廷につき出した。しかしながら、適当な訴因をみいだすことができなかった。そこで、これらの豺狼ども (とシェーカーの年代記者者はよぶ) は羊を、じぶんたちの間でやまわけたのち、羊の所有者をジョセフ・ミーチャム (Joseph Meacham) といっしょに、オルバニーに護送し、役人 (Commissioner) のとりしらべを、うけさせることにした。

役人の前にひき出されたかれらは、法律の遵守を誓約することを要求された。しかし、法律の内容は明示せられなかった。だが、かりに、役人が法律を「信ずるひとびと」の信仰と合致せしめるようにしていたとしても、そのような誓約をすることは、かれらの信仰に反することを、かれらは、よく、こころえていた。すべての、かくのごとき、おもてむきの義務は、偽善の仮面以外のなものでもない。その仮面の下で、かれらの指弾者どもは、正義・衡平の諸原理を擁護するためにブリテンの権力とたたかっている、と、主張している。しかしながらその正義・衡平の原理を蹂躪しているものこそ、まさに、ほかならぬ、かれら自身である。「信ずるひとびと」は、そう、みていた。だからである。

さらに、かれらは、かれらの告発者どもの意図が、この誓約を逆用して、かれらを困窮におとしめるか、あるいは、かれらに強要して、かれらの信仰に反して武器をとり、血をながさしめるか、に、あることを、しっていた。

そして、かれらが、内に秘めたるキリストの精神は、いかなる外的義務をもともなわずに、あらゆる正義の法をまもることを、かれらに、もとめ、かつ、可能ならしめるものである。それゆえに、かれらは、良心の命ずるところにしたがい、その要求には、したがわなかつた。ここにおいて、デビッド・ダッロー、ジエフ・ミーチャムおよび長老のジョン・ホックネルは投獄された。そして、すぐ、そのあと、ヘゼキア・ハモンド(Hezekiah Hammond)とジョエル・ブラット(Joel Pratt)が、ついで、マザー・アンが、メリー・パーチントン、長老ウイリヤム・リー、おなじく長老ジエームス・ホイテッカー、およびカルビン・ハーロー(Calvin Harlow)と、ともに、オルバニーで、逮捕・収檻された。これらのひとびとは、みな、このしごとの指導的な役割をになうひとびとであつた。

これは、みな、東部における一部の、ためにせんとするひとたちの、煽動によつて、おこなわれたものである。かれらは、たえず、当局および他の善良なるひとびとを煽動していた。しかしながら、オルバニーの役人たちは、概して、マザーおよび長老たちを親切に遇した。そして、多くの、もののわかつた・ひとたちは、つみのないひとびとを、ただ、特異な信仰といふことのほか、実際には、なんらの理由なくして、圧迫・投獄する——しかも、国民自身、外部からの圧迫のくびきから、みづからを、解放するために、たたかっている、まさに、そのときにおいて——不正・不義に対して不快の念を表明した。

しかしながら、いくら外部からかれらを束縛して苦しめても、神のことは束縛することはできなかった。牢獄のこうしをとうしても、神のことは群集にとかれた。多くのひとびとが、獄舎の中に在る長老たちを通じて、信者となつた。「信者となりし者おほく来り、懺悔して自らの行為を告げたのである。そして、神のことは、信者を信服させる、からの洪大なる、あらゆる罪の告白が、しばしば、衆人の前で、公然と、なされたものである。

「主のことば、大に弘まりて權力を得しこと斯くごとし。」(そう、年代記作者は、「使徒行伝」の句を借りて、表現している) 迫害者たちは、シェーカーリズムを弾圧せんがために、マザーと長老たちを投獄した。しかし、結果は逆であった。けれど、かれらが獄中にある間に、福音の弘布をみるにいたつたからである。

信者たちは獄中の信者たちと連絡したり、必要なものを自由に調達することをゆるされた。しかしながら、収檻後、しばらくして、マザーは、他のひとびとからひきはなされ、メリー・パーチントンとともに、オルバニーよりひき出され、河をくだつて、つれてゆかれた。それは、当時ニューヨークを攻撃中であった英軍にひきわたして、追放するためであった。しかし、迫害者たちの目的は達せられなかった。そのわけは、こうである。迫害者たちは、ポークープシー(Poughkeepsie)沖に一隻の船が碇泊して、英軍のために補給にあたっていることを知っていた。かれらはつみなきひとびとを迫害するにあたり、国を売ることをふせぐためだといって、愛国を口にしながら、そういうかれら自身は、英軍の手をかりて、マザーを追放する意図の下に、あきらかに国家の敵であるものを陰蔽する役割をはたし、それと共謀することを辞せなかつたのである。このことは、かれら迫害者たちが、マザーを追害し、追放しようとしたのは、愛国の至情より出たのではなくて、そうすることによって、つみぶかい生活に対するマザーの強烈なあかしをのぞきさうとのぞんだからである、ということ、あきらかにしめす。(そう、年代記の作者はしるしている)。しかしながら、アメリカ軍が右いつた船を拿捕するためにやってくるという警報があった。そのため、かれらがマザーをつれてポークープシーにつく前の夜に、乗組員は出帆してしまつた。かくて、かの女の迫害者たちのもくろみは水泡に帰した。そして、信者たちは、このできごとの中に、神のマザーに対する加護をみた。それは、ともかく、かくて、マザーはポークープシーの刑務所に入れられ、十二月のおわりころまで、

そこにいた。

オルバニーにおける長老たちと信者たちは、おなじく、十二月の二〇日ころ、知事のジョージ・クリントン(George Clinton)の命により、なんら正式の裁判をうけることなく、釈放された。この措置は、知事が事情の真相を知ると、即刻、とられた。そして、マザーの同志の長老ウィリヤム・リーとホイテッカーから、かの女へのしうちに關する報告と、かれらによるかの女のためのとりなし、を、うけると、知事は、即座に、かの女を釈放する命令を、発した。かくて、かの女は、一七八〇年二月のおわりころ、釈放された。かの女は、喜色満面、かの女の子どもたちのもとへかえってきた。みんなは、ほつと、安堵のむねをなでおろした。ジョージ・クリントン知事は、教会がたった後、上記の事件から二〇年以上を経た後、レバノンをおとづれ、「あなたがたのマザー」(かれのいったことば)釈放の件に言及して、じぶんは、あのような措置をとったことを、とても、よろこんでいる、と、いった、というのである。

右に述べた迫害の件は、ほとんど、シェーカーのひとびとのつたえるところによつたものである。しかしながら、シェーカーのひとびとが迫害をかうむるにいたつた原因は、右にいうところ、いささか、明瞭をかく。すくなくとも、そのきらいなきを得ぬものがある。そこですこしく補足を加えよう。原因は一にとどまらない。かぞえあげれば、いろいろあろう。まず、マザーが、キリストの再来だと僭稱するのが氣にいらぬ。つぎには、かれらのそうぞうしいあつまりが反感をそそる。さらに、セリバシーの主張のため幸福な家庭が破壊される。それは堪えられない。そこえもつてきて、かれらは、キューカーのながれをくみ、武器をとり、血をながすことを拒否する。それがいけない。けだし、当時は、さきにもふれたごとく、独立戦争の最中であつた。アメリカ人は、みな、武器をとつ

て、たちあがっていた。その中で、かれらは武器をすてよ、と、とく。すくなくとも、武器をとることを拒否せよ、と、とく。かれらがイギリスのスパイあつかいをうけるのは、かならずしも、あやしむにはあたらぬところで、なければならぬであらう。それは、ともかく、イギリスならびにアメリカにおけるマザー・および長老たち、および、その他の信者たちの告発・収檻のすべてを通じ、そこに、かれらの生活・徳性に關して、なんらの欠陥の存するをみない。また、単なる中傷家からのほかは、かれらの信仰ならびにあ、か、しに關して、なんらの惡声のはなたれるをきかない。このことは、とくに、注目するにたる。また、かれらに對する迫害は、かれらによれば、ただ、噓偽の宗教と彈圧の精神にのみ起因する。そして、それらのものは、英領においては、よつてきたところ、とおく・ふかいものがある。そしてその影響はアメリカにおよび、いまにいたるも、なお、そのあとをたつにいたらない。シエーカーのひとつとは、一九世紀に入つて、なお、そういうている。

しかしながら、この問題を詳論し、あるいは、マザー・長老たち、および、アメリカにおける信者たちが、いろいろの場合に、かれらのいゝゆる先人の噓偽の宗教をおしこまれ・邪惡折伏の名の下に・無害のひとつとにゆるしがたい暴行を加える不逞のや、から、からこうむつた非道について、いま、ここに細述するにはおよばないであらう。ここでは、ただ、単に、つぎのことをいえば、たるであらう。すなわち、かれらの暴威の主たる目標はマザー・アンであるということ、かの女が主宰していた時代、かの女は、しばしば、残酷・無恥・無慘な凌辱をこうむり、ときには、超自然のちからによつて、わずかに、身を全うすることができたと、おもわれる、と、いうこと、長老たちも、また、ときに、無法な暴徒に、きわめて、むごく、打たれ、はずかしめられたが、不道徳なという糾弾は、けつして、立証されるにいたらなかった、と、いうこと、そのほかのひとつとも、また、ただ、その信仰と十字架

を負う生活というだけの理由で、生命財産の侵害をこうむることはなほだしいものがあつた、と、いうこと。

しかしながら、マザーのあかしは、うちがちがたくみえた試験ともろもの困難の状況の下において、よく、堅持され、高揚された。そのような状況の下におけるかの女の不動・不退転・堅忍不拔は、とても、信じられぬほどのもの、であつた。かの女には文字・学問の素養はなかつた。しかし、かの女には、かくれたる神の智と力があつた。それによつて、かの女は、確信をもつて、聖書を説き、事物の本質を啓示した。なんびとも、いかなる公平の原理においても、かの女のことばのちからに、さからうことは、できなかった。そう、シエーカーのひとびとは、つたえている。

マザーと長老たちは、刑務所から釈放されると、また、オーターブリートに、あつまつた。ニューヨーク・マサチューセツト・コネチカツト・ニューハンプシャー・メーンの諸州の遠隔の地方から、おびただしい数のひとびとが、そこに、かれらをたづねてきた。それらのひとびとは、信仰を得た。神の恩寵のちから——それは罪障の消滅・靈魂の救済のために、おしみなく顯示された——を通じて、多くのひとびとは歡喜にみちあふれた。その歡喜は名状しがたかつた。かつ、榮光にみちみちたものであつた。そして、かれらの、神のみちとわざについての理解を、ふかめた。シエーカー年代記は、そうしるしている。

附記 前節最後に附記せるところは、本節にも、くりかえされねばならない。

六

一七八一年五月、マザーと長老たちは、オーターブリートをあとに、巡歴の旅にのぼつた。いたるところ、福音

はうけいれた。そして、かれらのおとすれた主要なところでは、その近郊からも、ひとびとがおしかけてきた。そして、布教は、どこでも、聖霊の恩寵に浴し、つみをさぐりもとめ、ところの中のよこしまをおいだした。そこで、信者たちはかれらのもともきよい信仰に入り、ちからの加わるをおぼえ、つみから身をまもることができ、平和と慰籍でみたされ、多くのものが、信仰を、ますます、かたくした。

そう、シェーカーの年代記はしるしている。しかし、それ以上、くわしいことを、そこにみいだすことはできない。そして、それだけでは、あまりに抽象的である。われわれは、いますこし、たちいつて、具体的にながめたいと、おもふ。そこで、以下、しばらく、それを、こころみるであらう。

はなしは、すこし、まえにさかのぼる。一七六九年よりも以前にさかのぼる。諸説紛々として、はつきりとしたことはいえない。しかし、一七六九年以後でないことはたしかである。その数年前のことである。マサチューセツツのボストンの丘をこえて一五リーグばかりいくと、ハーバードという新開拓地の部落 (the backwoods hamlet of Harvard) があつた。そこにシェードラック (Shadack Ireland) というおとこが美人をひとりつれて、あらわれた。シェードラックは、ほそながいあご、あかい・もじゃもじゃのかみと、うつくしい・きよろきよろする目をもつた、ひよろたかい、のつぽでき、しゃな、おとこであつた。かれは、かずかずの天分にめぐまれていた。その中に、病気の治療・天啓の感得もあつた。もと木細工人 (wood worker) で、バンカー・ヒルのすぐそばのチャールスタウン (Charlestown, hard by Bunker Hill) の自宅で、陶製のタムパイプ (Clay pipe) をつくつていた。しかし、「あたらしいひかり」 (New Light) の宗教の靈氣を身を感じると、この平凡なしごとをすててしまった。

かれは、じぶんは不死である、じぶんは神から使命をさづかったものである、と、いった。そこまではよかった。ひとびとは、それを、おもしろがった。治安判事すら、べつに、とがめだてをしなかったくらいである。しかしながら、かれは、さらに、すすんで、国教である組合教会 (the established Congregational church) は腐敗している、僧侶は怠惰放縱である、と、攻撃した。ここにいたって、神父たちは激昂した。そして、ただちに、かれを異端として、告発した。シェードラックは、まごまごして、つかうような、おとこでは、なかった。かれは、夜にまぎれて、すがたをけた。そして、そのあくる日の、あけがたまでに、ハーバードのクーパー農場 (the Cooper place) に、あらわれたのである。そして、かれは、ひとびとに、といた。そして、いった。じぶんは神にめされ、妻と六人の子どもをすてきたものである、アビゲール (Abigail Lougee) はじぶんの精神上の妻 ("spiritual wife") である、と。——ただし、かれはかの女とベッドをともした、と、いうことである。クーパー農場・ウィラード農場 (the Willard place) のひとびとは、かれをかくまった。かれらは、かれのとくところに、みみをかたむけた。かれらは、かれに帰依した。そして、一七六九年の秋、ウィラード農場に建築がはじまった。建築は、たいてい、夜間におこなわれた。一二人ばかりの男子が、角燈と月明を利用して、工をいそいだ。やがて、たてものが、できあがった。それは「四角い家」(The Square House) と、よばれた。「あたらしいひかり」の信者たち (New Lighters) が、そこに、うつりすんだ。アビゲールも、その中にいた。さらに、いまひとりのアビゲールもいた。かの女はクーパー姓であった。われらのすがたなき予言者——かれは、世間から、身をかくしていた。それは異常なものであった——が、その中にふくまれていたことは、いうまでもあるまい。ここにうつりすまないひとたちは、農場に来て、はたらいて、予言者の家計をたすけた。

シェードラックは、じぶんの信者たちを、一つのソサイエティーに結成した。かれの感化力は偉大であった。ひとびとは、身体・財産を投げ出して、かれの手にゆだねた。ウイラードは、農場の地券 (a deed to the farm) を、ソサイエティーのために、かれにあたえたぐらいである。

シェードラックの不死の予言は、ほんとと、完全に、一〇〇パーセントまで、成功した。ところが、一七八〇年の夏、一夜、破綻が生じた。かれはベッドから起きた。たちまち、激痛にみまわれた。うめきながら床上をのたうちまわった。そして、神のいかりにふれた、と、さげんだ。アビゲールが、大声をあげて、すくいを、もとめた。クーパー・アビゲールが、やっと、あかりをつけた。しかし、かの女が、それをもって、かけつけたときには、シェードラックは、すでに、たおれていた。

かれは、くるしいいきの下から、あえぎながら、いった。じぶんが死んだようにみえても、うめてはいけない。三日目には再生するのだから。「もし、再生しなかったら」と、かれは、こえをほそくして、つづけた。「九日目に再生する」。

かれは、たしかに、死んだようにみえた。信者たちは、かれのことばを信じた。すくなくとも、かれらの間では、たがいに、信ずる、と、いいあつた。かれの栄光の余恵にあずかる、と、いう、かれらの信念を維持するために、かれらは、そう信じないわけには、いかなかった。かれのからだをベッドによこたえて、かれらは、断食し、祈禱した。一部のものは、あくる日、いつものごとく、はたらいた。それは、隣人が、なにかかわったことがおこつたのではないか、と、不審の念をおこし、おそらく、やってきて、かれらの指導者が、いつものかれではなくなつてゐることを、さとることのないため、であつた。

三日目がきた。しかし、そのときには、からだの変化がともひどかった。もつともつよく信じていたものでも、もはや、それ以上、通夜をつづけることが、できなかつた。もつとも冒のつよい二人のものが、遺体を棺におさめ、地下室にはこび、レンガでふさいでしまった。数ヶ月の後、かれらは、夜間、それを、小麦畑にうつし、墓の背後に、草を植えた。やがて、どこからともなく、かれの死がつたわつた。まつたくのわらいぐさになつた。ついに、信者たちの中には、いや気がさして、信仰に背をむけるものが、出るにいたつた。

シェードラックの「精神上の妻」アビゲール・ルーギーの消息は、その後、杳として、しれない。おそらく、さう、かたにかえつたものと、おもわれる。そう、ウェッバー氏は推測している。シェードラックの死後一年ばかりして、当時、なお、「スクエア・ハウス」にすみつづけていたアビゲール・クーバーの戸口に、一人の婦人があらわれた。みれば、まるまるとこえた、まるがおの、みめ、みぐるしからず、としのころは、もう、五〇になんなんとする、こがらの婦人である。そのあとには、女性が数人と男性が六人つきしたがっている。男たちは、膝まであるう、わぎをきており、ひろくてひらたい・ふちつきの帽子をかぶり、毛をかつたばかりのろばのように四角にたれた・まんがみをしていた。女たちは、ひよけ帽子をかぶり、うすちやいろのきものをきており、むねのところに、ハシケチがピンでとめてあつた。——それは、ひとを誘惑する輪廊グライズをやわらげるためであることを、アビゲールは、後にいつて、しつた。

かの女は、ひややかに、かれらに、とぐちからたちされ、と、いつた。おとこたちの中のひとりが、しずかに、そのリーダーを紹介して、こういつた。「このひとは、アンといって、ことば（福音のこと）である。キリストが、かの女に、再臨しようとしていられる。われわれは、あなたに、福音をもたらすためにきた。」

「福音なら、もう、たくさん」と、アビゲールは、きつぱり、ことわった。かの女は、このひとたちから福音を受けることを、のぞまなかつた。それは、たしかである。かの女は、アイザック・ウィラード (Isaac Willard) の家で、ここ数夜にわたるさわがしいあつまりを、耳にしていた。そして、かの女はそれをきらっていた。さらに、かの女は、この数月間、かれらのことを、新聞で、読んでいた。かの女は、リーダーのアンが、イギリスのマンチエスターからきた・無学な女工であり、この国では、イギリスのスパイとして投獄されていたことを、しっていた。かの女は、かれらがクエーカーの徒で、祈禱のとき、あまりにも震動・跳躍するので、シェーキング・クエーカーズとか、シェーカーズとか、よばれることを、しっていた。また、かの女は、かれらが妖術をつかつて、病人から悪魔をおいはらったり、男女同衾はつみふかいことである、と、いったりするもので、いつも、むちうたれ、まぢからおいはらわれていることを、しっていた。

アビゲールが、きつぱりと、ことわったにもかかわらず、シェーカーのひとびとは、かれらのあつまりに來たあたらしいひかりのひとびとのひとりので、すけで、ずるずると、家の内に、はいりこんでしまった。かれらは、しずかに、アビゲールに「あなたが、われわれをすきになるように、してみせる」と、いった。「わたくしは、あなたがたをすきになど、けっして、ならない」と、かの女は、すげなく、いききった。長老のウイリヤム・リーは、ただ、わらうのみであつた。かれのシスターのマザー・アンは、耳をかそうともしなかつた。「もちろん」とかの女は、さげんだ。「こここそ、わたくしのためにさだめられたところではないか」と。かの女は、ふしぎそうに、あたりを、みまわした。そして、いった。「わたくしは、このへやを、イギリスにいたとき、ビジョンの中でみた」と。

アビゲールは、ますます、いらだつてきた。そうしている間に、かの女のもとが、たべものを、もつてきた。長老ウイリヤムのながい・難行告行をきんだかおが、びりつと、癡癡した。そして、その目になみだがやどつた。かれは、「わたくしは、神がわれわれにたべものをめぐみくださると、ありがたくて、なくのが、くせでして」と、いいわけをした。

アビゲールは、この、みえすいたいいいわけを、じつと、こらえた。そして、マザー・アンが、じぶんたち一行は、つぎのまちに約束があるが、また、もどつてくる、と、いったとき、かの女のいかりとおそれは、いつそう、ました。「まあ、しばらく、あなたのところに滞在して、あつまりをもつつもりです」と、アンはアビゲールに、だめを、おした。

長老ウイリヤムは一箇の林檎をだんろだなの上にのこして、これをながめていれば、ビリーバーズのことをおもふようになり、と、かれらのホステスに断言した。かれらが行つてしまうと、かの女は、それをなげすてたい衝動にかられた。しかし、なぜか、そうしなかつた。それどころか、その後、日々、それを手にとり、それをのこして行つたひとびとのかんがえることが、はげしくなつた。

マザー・アンは、いったとうり、「スクエア・ハウス」に、数月間、滞在し、あつまりをもつた。ハーバード付近でも、千年王国の熱は、たかまつていた。ひとびとは、しごとをほおりだして、「スクエア・ハウス」にあつまつた。半年の間、二〇〇人ものひとびとが、時計台のぐるりで、ふだんぎのまま、きそうて、いのり・うたい・おどつた。そして、ときどき、個々に、ぬけだして、なやでまどろんだり、または、みんなのために、たべもの、のしたくをした。たべものは、信者たちも、できるかぎりの補給をした。しかしながら、補給の大部分は、ニュー・レ

パノンと、かの女の感化を受けた組合から、まぐさくるまにつんで、はこびこまれたものである。

その狂騒のはなはだしさは、「スクエア・ハウス」で、一時に、数十組合がおどつたために、家かたおれそうになり、はりにつつかいぼうをせねばならなかつたほどである。おどりは、家の中でおこなわれたばかりではなかつた。そして、このさわぎは、数マイルさきまでも、きこえた、と、いうことである。

しかしながら、どこにもよくよくかぜというものはない。シェーカーリズムへの帰依者がふえる一方には、それに対する反感も、また、たかまつていつた。ここでも、また、社会は、いらだち、いかり、そして、おそれた。夫が、妻が、婚約者が、シェーカーリズムに帰依し、家庭は破壊され、婚約は解消した。そこには悲嘆にくれるものがあった。そして、それが、日とともに加わつた。イギリスのスパイという非難・攻撃も、再発した。暴徒と地方国民軍が合体して、「ニュー・ライト」の農場をこわし、隠匿武器を搜索した。武器はひとつも、みつからなかつた。しかし、暴徒は、しばしば、無抵抗な・おどっているものに、不意におそいかかつた。あぐたいをついた。ほうほうと、はやした。まどから石をなげこんだ。一度など、アンの兄弟は打たれて、死にかけ、ほかのひとびとのいり、で生きかえつた。また、アンも、ねまきのまま、零度のさむざらの下を、そりで、ハーバードまでひっぱって行かれ、そこに、おっぱりだされた。しまいには、ある日、マザー・アンと数名のしたしいともだが、となりむらに行つていたとき、そのほかのシェーカーのひとびとは、みんな、とりかこまれて、一〇マイルも、はだしで、かりたてられた。つよいものが、身をなげ出して、よわいものの上にふりおろされる・むちを、うけた。――打たれて、ちみどろになつたものさえあつた。シェーカーのひとびとは、うたい、かつ、いのつた。ついに、暴徒は、とまつた。

そして、シェーカーのひとびとに、あるきつづけよ、ハーバードにかえつてはならない、と、命じた。一同は、日のくれぬうちに、かえった。

まちの責任あるひとびとは、そこで、アンに、かの女とよ、そのが、みな、たちさらねば、殺戮がはじまることになる、と、つたえた。しかし、もし、アンをふくめて、よ、そのが、みな、たちさるならば、土地のシェーカーのひとびとは、これ以上、いじめられることはない、と、いう、とりきめがもち出された。法律の保護はもとむべくもなかった。そこで、マザーは同意した。——しかしながら、神のみちびきがあったときには、かえつてくる、と、声明した。

かくて、かの女は、ゆうゆうと、アメリカでの最初の帰依者のすむ・ニューヨークの州境・ニュー・レバノンに帰還した。

以上、わたくしは、ながながと、シェーカーのひとびとの、ハーバードにおけるも、ようについて、記述するところがあった。それは、わたくしが、主としてよるところの、シェーカーイズムの年代記の作者の東部地方における布教についての記述が、抽象に失して、具体性を欠いていることを、うらみ、いささか、その欠陥をおぎないたいとおもうたからにほかならない。そのことは、すでに、この記述のはじめにおいて、いつておいたところである。しかし、それにしても、あまりに、一部に偏しすぎるとのそ、しりを、こうむるお、それなしとせぬ。なるほど、記述は、ハーバード付近にかぎられている。それは、そのとうりである。それでは、なぜ、そうしたか。それには、それだけのわけがある。そのわけというのは、こうである。のちに述べるごとく、シェーカーのひとびとは共産体を形成

する。そして、それ故に、それは、ユートピアン・ムーブメントの一つのあらわれであり、その源流でもあるのである。したがって、シェーカリズムにおいて、その共産体制は、さわめて、重大なことがらでなければならぬ。すくなくとも、われわれの目からみると、そうでなければならぬ。ところが、ウェンバー氏によれば、シェーカーのひとびとの、この共産体制は、そのアイデアを、実に、この、シェードラックの組織より得たものである。それだからである。氏は、こう、いつている。

まことに、ふしぎなことには、——といって、類のないことでは、けっして、ないが——シェードラックの組織は、かれが死んでから後も、なお、生きのこった。そして、シェーカーのひとびとによって、吸収された。それは、ある意味においては、他のいかなる真誠な共産体 (Pious Ape communarian establishment) よりも、ながくつき、まことに、連続、今世紀におよんでいる、と、いつてもよい。

また、こうも、いつている。

マザーはシェードラックのしごとのあるものに感心した。そして、ここで、かの女の後継者たちは、クリスチャンにとって、共同分配が必要であるという思想 (the idea for Christian necessity of communal sharing) を、吸収した、と、いつて、さしつかえない。

それでは、シェーカーのひとびとは、いかに共産体制をととのえたか。それが問題となる。しかも、重大な問題となる。しかし、それだけに、それは、後に、これらの組織をとりあつかう場合にゆずるを、適切とする。わたくしは、そう、かんがえる。だから、わたくしは、しばらく、この問題をこえて、さきにすすむであらう。

- (1) Everett Weber, *ibid.*, p. 40
- (2) *ibid.*

(3) *ibid.*, pp. 53-51.

附記 本節における、シェードラックおよび迫害事件は、ほとんど、前掲、Everett Weber, *Escape to Utopia, The Communal Movement in America*, Hastings Publisher, New York 22, 1959. に負う。原文は、かすすくなく貴重な根本資料でもとづき簡潔・雄勁、加えるにドラマチックな生彩さえ帯びる好文章。切に、読者の一読をすすめたいところのもの。

七

遠隔の地の信者たちの間におけるつとめをはたして、アン以下シェーカーのひとびとがオーターブリートにかえりついたのは、一七八三年の八月であった。約二年三ヶ月留守にしていたわけである。

翌一七八四年七月二十一日、長老のウイリヤム・リーが、オーターブリートにおいて世を去った。行年四十四歳。

長老ウイリヤムの死去は、より大なる試練——それはマザーの現存と保護をうしなうにいたることであり、それにかんがえることは、多くのものにとつて、ほとんど、たえられぬようにおもわれた——に対して、信者たちに、こころがまゑをさせるに役立った。かの女も、あたえられたる使命を終えて、オーターブリートにおいて世を去った。ときに一七八四年九月八日。ちなみにいう。かの女はなんのくるしみもなく、やすらかにその最後のいきをひきとった、と、つたえられる。そのいきのたえる直前、かの女はこういつた、と、いう。「兄弟のウイリヤムが栄光の戦車チャリオットに乗って、わたしをむかえにやってくるのが、みえる」

かくて、アメリカ革命の黎明期、良心の正義が確立されはじめた時、キリスト再臨の晩星はこの世からそのすがたを消した。しかしながら、その後には、「正義の太陽」がいよいよその光輝をまし、すべての約束せられたる「後の日の栄光」がつづく、——そうわれらの年代記作者はいう。そして、さらに、つづけて、いう。

かくて、キリストの顯現はあますところなく、いとも完全に成就されたのである。それはクリストファー・ラブ (Christopher Love)——クロムウエルの治下に首をはねられたひと——の有名な予言にあたるといなく、「なんじよりぞ、おお、イングランドよ、一つのきらめく星がのぼるであらう。そのひかりとこえは、諸天をふるわし、尊きイエスに帰伏するであらう。」(“Out of thee, O England, shall a *bright* star arise, whose light and voice shall make the heavens to quake, and knock under with submission to the blessed Jesus.”)

マザーの死後、信者の指導と保護のための神の恩寵と指名は長老のジェームス・ホイテッカーの上にあつた。サイエチーは、ここから、かれを、長老として、みとめた。かれの主宰の下において、つみとげがれをほらいのぞき、福音を信じ、福音にしたがうために・かど、でしたひとびとの結合と協和をおしすすめ、したがわれないものはいましめ、よわきものをちからづけ、信じるものをはげます、そのつとめは、つづけられ、ますます、さかんと、なつた。かくて、そのつとめをはたしたる後、かれは、一七八七年七月二〇日、コネチカット州のエンフィールド (Enfield) において他界した。行年三七歳。出生は一七五一年二月二八日、イングランド・マンチェスターちかくのオルダム出身。

長老ジョン・ホックネル (長老とよばれるひとの中、ヨーロッパから来た最後のひと) は、長老ジェームスの死後も、なお、ながく、生存、一七九九年二月、オーターブリーにおいて他界、行年七六歳。

しかしながら、長老ジェームスの死後、地上における指導の恩寵 (visible gift of administration) は、アメリカにおいて福音を感得したひとびとの上に下りた。とくに、二人にさづけられた。すなわち、ジョセフ・ミーチャムとルシィ・ライト (Lucy Wright) の二人である。この二人は、神の特別の恩寵と指名により、協心戮力、信者

の地上における団体の両親役になることが、みなによって、承認された。この二人の特別なはたらきによって、信者たちは、あつまつて、一家をなした。それは、キリスト教会に關する神の啓示によれば、福音のまことの秩序にほかならない。そう、シェーカーのひとびとは、かんがえる。その秩序が確立されたのは一七九二年のことである。それより約四年後、一七九六年、長老ジョセフは、その使命を終えて、ニュー・レバノンにて逝く。行年五四歳。一七四二年二月二日コネチカット州エンフィールドの産。

ファーザー・ジョセフの後には、ルシィ・ライトが最高の主宰者となつた。かの女の主宰の下において、東部諸州では、信徒のサイエチーの拡大をみた。また、オハイオ、ケンタッキーの兩州に、いくつかの恒久的なサイエチーが設立された。かの女がその使命をはたして世を辞したのは、一八二二年二月七日。行年六一歳。場所はニューヨーク州オルバニー郡オーターブリート。一七六〇年二月五日、マサチューセッツ州パークシャー郡ピッツフィールド (*Pittsfield, Berkshire County, Mass.*) の生れである。

(未完)

(1) Everett Webber, *ibid.*, p. 54.

附記 本稿、第四節に附記せるところは、本館にも、くりかえされねばならない。